

introduction

日常診療において足疾患の対応に困られた経験はないでしょうか。これまでわが国において、整形外科のなかで足に関する教育が十分に行われてきたかという点、そうではない部分も多いと思います。しかし、日本整形外科学会の新患患者の全例調査によりますと、足疾患の患者数は全体の11%であったことが報告されております。これは頸椎の患者数の割合と同じで、7%の肩関節、5%の股関節よりも多く、10人に1人は足の患者ということであります。米国の整形外科病院では、ほぼすべての病院に足の外科の専門医がおり、この専門医は整形外科医だけではなくポダ医（podiatrist：足病医）が務める場合もあります。足病医は一般の医師と同様に4年制大学を卒業した後、4年間の足病医学部で学び、手術もできる医師であります。それだけ米国では足疾患の需要が多いということでもあり、今後、わが国でも足疾患は飛躍的に増加してくるものと考えられます。わが国でもようやく大学病院や地区の基幹病院などの研修病院では、徐々に足の外科の研修ができるようになっております。しかし、まだ充足している状況にあるとはいえません。さらに先ほどの日整会の統計によりますと、患者の9割は保存的に治療されており、これからの整形外科では保存治療を極める必要があります。

本特集では日常診療において診察する機会が多いと考えられる足疾患をピックアップし、これまで足に対してなじみのない方でも、診療に困らないレベルの知識をもっといただくことができると考えて企画いたしました。各執筆者の先生には、特に外来レベルで治療できる保存治療に重点を置いて記載していただいております。また若い先生方にはこの特集がきっかけで、1人でも多くの先生に足の外科に興味をもっといただくことができたいと思います。そのためにわが国の足の外科における新進気鋭の若手から中堅の先生に執筆をお願いいたしました。本特集が、明日からの先生方の診療にお役に立てれば幸甚に存じます。

奈良県立医科大学整形外科学
田中康仁